

Kawasaki 美術館  
金山平三の世界



「奥入瀬の流 (百両橋附近)」 1945-56年 (昭和20-31年) 31.2×40.8cm 油彩・板 川崎重工株式会社蔵

奥入瀬の本質を掴んだ  
彩色の美しさ

青森と秋田の県境に位置する十和田湖から太平洋に向かって流れ出でる奥入瀬川は、その上流に有名な奥入瀬渓流を有する。本流と支流に多くの滝を形成するその渓流の美しい景観は、多くの人々を魅了している。

金山が最初に十和田湖と奥入瀬を訪れたのは一九四四年(昭和十九年)六月のこととされている。そして終戦後の混乱の中、一九四六年(昭和二十一年)からはほぼ毎年、紅葉の十月頃を中心にこの地を訪れ、多くの作品を手がけた。

本作は紅葉の頃、奥入瀬川の起点、子ノ口からしばらく下った百両橋附近の清流を、下流側から遠近的にとらえたもの。詳細な金山伝を著した歌人の飛松實が言う「説明を排し、枝葉末節を簡略化した本質把握の見事さと、彩色の美しさ」はここでも発揮され、とりわけ水流と一体化した筆致の動きの見事さは、筆舌に尽くしがたい。

(兵庫県立美術館学芸員  
相良周作)



金山平三と川崎重工

金山平三画伯は、1883年(明治16年)神戸に生まれ、1964年(昭和39年)80歳で生涯を終えました。1909年(明治42年)東京美術学校(現在の東京芸術大学)を首席で卒業した後、欧州各地で制作を重ね、1916年(大正5年)には、第10回文展に出品した作品が特選第二席になりました。生涯にわたって旺盛な創作活動を続け、自然風土を相手に多くの名画を残し、その業績は近代洋画史上に燦然と輝いています。

川崎重工は第11回文展に出品された「造船所」が縁となり、その後、交流を深めました。画伯の晩年には、自選作品138点の永久保管の依頼を受け、その作品を預かるほどでした。後になり川崎重工は、一部の作品を残して、兵庫県立近代美術館(現・兵庫県立美術館)にすべて寄贈しました。